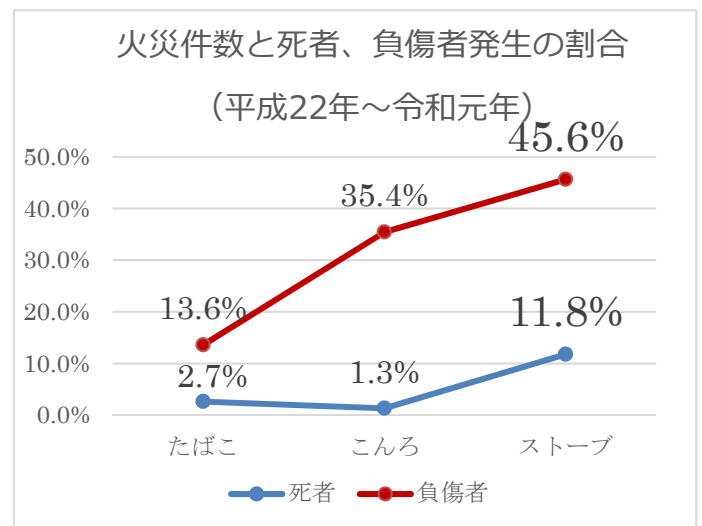
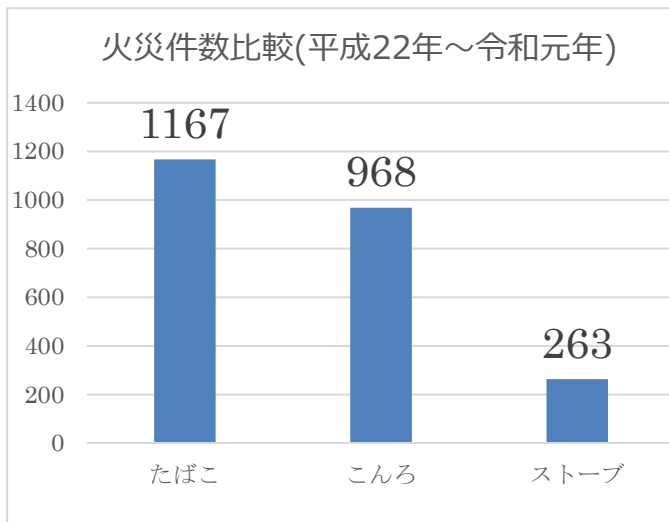


横浜市内でストーブから発生した火災件数とその危険性

電気ストーブ、石油ストーブ、ガスストーブ、石油ファンヒーター、オイルヒーターなど、ストーブには様々な種類のものがありますが、どの種類のものでも、いったん出火すると被害が大きくなりやすいのがストーブ火災の怖さです。

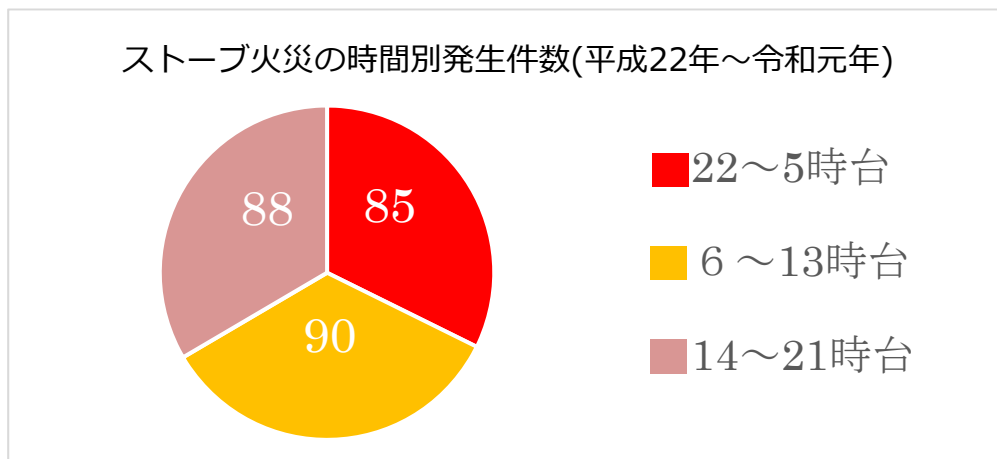
横浜市内では、過去10年間で263件のストーブ火災が発生し、31人の尊い命が失われ、やけどなどで120の方が負傷しています。

これは他の火災原因による死傷者の発生率と比べて、非常に高い割合となっています。



また、発生した件数を時間別に見ていくと、多くの方が就寝していると思われる時間帯(22時台～5時台)にも日中とほぼ変わらない件数の火災が発生しており、ストーブ火災による死者31人のうち14人がこの時間帯に発生しています。

ここからもわかるとおり、昼夜を問わずストーブの取扱いには、より一層の注意が必要です。



1 電気ストーブの危険性

ストーブ火災全体の特徴として、電気ストーブに可燃物が接触し出火している例が多いことが挙げられます。

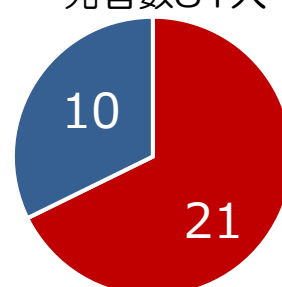
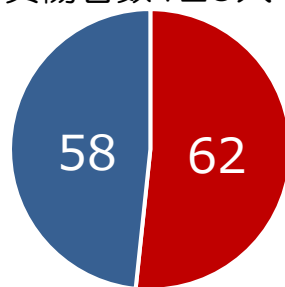
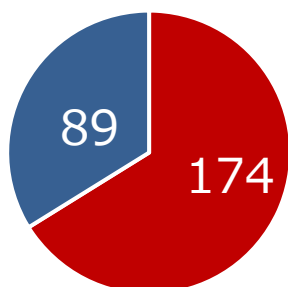
電気ストーブは、灯油等の燃料がいらす、換気の手間もかからないことから、手軽で安全だと思われるがちですが、適切に使用しなければ火災の原因となります。

ストーブ火災の電気ストーブとその他のストーブの比較（平成22年～令和元年）

火災件数263件

負傷者数120人

死者数31人



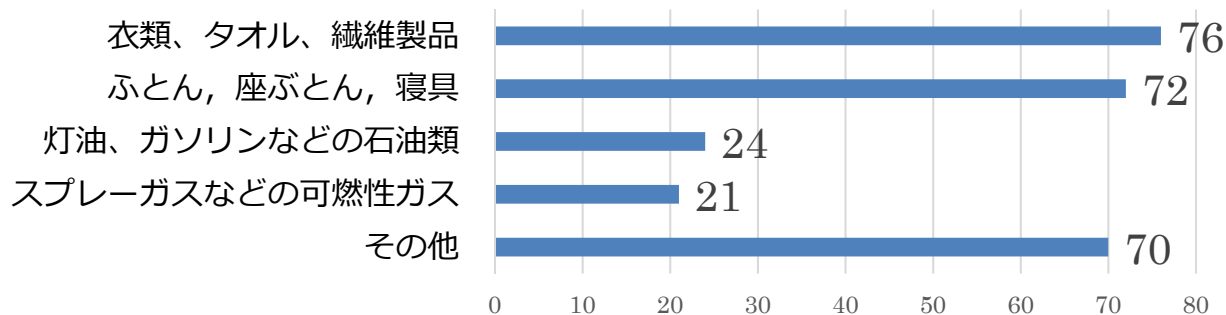
■ 電気ストーブ ■ その他のストーブ

※ここでいう「電気ストーブ」には、電気ストーブ、カーボンヒーター及びハロゲンヒーター等が含まれています。

2 着火物(始めに火がついた物)別の状況

ストーブが出火原因の火災を着火物別に見ると、「衣類やタオルなどの繊維製品」が第1位で、全体の29%を占めており、第2位に「布団、座布団などの寝具類」、第3位に灯油などの「石油類」が続いています。

ストーブ火災の着火物別状況(平成22年～令和元年)



3 着火物別に見る火災の特徴と注意点

(1) 衣類

ア ストーブの近くに干してあった洗濯物に着火する事例が多く発生しています。

イ ストーブと着火物が接触していなくても、ストーブからの熱が原因で火災になることもあります。

事例

- ・ストーブの上方に洗濯物を干し、その場を離れたため、洗濯物が石油ストーブ上に落下し出火



ストーブの上に干された洗濯物が..



ストーブの上に
落下



そのまま時間が経過して



出火

火災を防ぐポイント

- ・ストーブの上方や近くに洗濯物を干すことは危険です。絶対にやめましょう。
- ・ストーブの周りは常に整理整頓しておきましょう。

(2) ふとん・座ぶとん・寝具類

ア ほとんどが電気ストーブから発生しています。(72件中69件)

イ 22時台～5時台の間に多く(72件中40件)、主に就寝中とみられる時間帯に発生しています。ご自身がかけている布団が燃えることもあり、死傷者が発生する確率も非常に高くなっています。

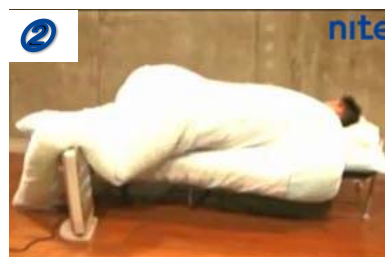
事例

- ・ストーブをつけたまま寝てしまい、寝返りを打った際に掛けぶとんがストーブに触れ出火



布団の真横で
電気ストーブを使用

寝てしまい、寝返りを
打った際に、布団がストーブに接触



一定時間経過後、ストーブとの
接触部分から出火

出火

火災を防ぐポイント

- ・寝る時やその場を離れる時は、必ず電気ストーブやファンヒーターなどのスイッチを切り、プラグをコンセントから抜く習慣をつけましょう。

(3) 灯油などの石油類

- ア ストーブをつけたまま、給油を行ったため出火しています。
- イ 給油後、タンクの蓋がきちんと閉まっていないため、燃料が漏れ出火しています。
- ウ ガソリンなど、誤った燃料を給油したため出火しています。

事例

- ・ストーブをつけたまま、カートリッジタンクに給油し、タンク室に入れる際、蓋の閉まりが不完全だったため、蓋がはずれ、灯油が燃焼筒にかかり、出火
- ・石油ファンヒーターのカートリッジタンクに、誤ってガソリンを給油した。点火後、ガソリンが混入したカートリッジタンクの内圧が上がり、ガソリンがあふれ出て石油ファンヒーター本体の炎に引火し、出火

火災を防ぐポイント

- ・給油時は必ずストーブを消火し、給油後は蓋がしっかり閉まっていることを確認しましょう。
- ・給油の際は、取扱説明書等に記載のある燃料の種類を確認しましょう。

(4) スプレー缶などの可燃性ガス

- ア 熱せられたスプレー缶が、破裂しています。
- イ 放射されたガスが、ストーブの火に引火しています。

事例

- ・ストーブの近くにいたゴキブリに殺虫剤（スプレー缶）を噴射したため、放射されたガスが石油ストーブの火に引火して燃え上がり、周囲にあった物に着火
- ・石油ファンヒーターの前に置かれたヘアスプレーが、温風により熱せられ破裂。その際、破裂したヘアスプレーのガスがファンヒーターの炎に引火

火災を防ぐポイント

- ・ストーブの近くに、スプレー缶を置くことは絶対にやめましょう。
- ・スプレー缶などを使用する際は、ストーブから十分離れ、十分な換気をしましょう。

これまで見てきたとおり、ストーブ火災はそのほとんどが使用者の注意不足が原因であり、危険性を理解して正しい使い方をすれば防ぐ事ができます。
安全な取扱方法をしっかりと身につけて、寒い時期を安全で快適に過ごしましょう。

◆◆火災調査メールマガジン◆◆

火災調査員が、毎月 15 日前後に時期に応じた火災予防の
情報を配信しています。

配信登録はこちらから

⇒<http://ml.city.yokohama.jp/mailman/listinfo/kasai-chousa>

